

● 国語科教育 ●

主体的に言語活動に取り組み、ともに思考力、判断力、表現力を高め合う子どもの育成 ～国語科における「主体的・対話的で深い学び」を目指して～

三重県 桑名市立星見ヶ丘小学校（前校長 武藤耕嗣）

- ① 教員の教材研究力・単元構想力の向上を目指す。
- ② 主体的・対話的で深い学びのある授業づくりを進める。
- ③ 「目指す児童の姿」を明確にして、授業研究による実践の検証を図る。
- ④ 帯時間を活用して、言語指導の充実を図る。
- ⑤ 学校図書館や教室の言語環境を整備して、読書活動の活性化を図る。

〔はじめに〕

本校は桑名市西部の丘陵地に位置し、平成13年に星見ヶ丘団地の開発と共に開校した。平成30年度よりコミュニティ・スクールとなり、教育への関心が高い保護者や地域住民と連携して、「夢のある楽しい学校」を目指して教育活動を推進している。

平成27年度より4年間、「考え、議論する道徳」授業の創造を目指して学習指導過程の在り方や効果的な指導方法の工夫に焦点を当てて研究を進めた。4回の研究発表会で研究の成果を発信し、多くの先生方からご指導を頂く機会を得ることができた。



◆運動場から見た校舎

I 研究主題について

1. 児童の実態から

本校が道徳科の研究を進める中で、児童の考えを表出させて深める表現活動をさらに充実させるために、言葉の力を高める必要があるという課題が見えてきた。

本校児童の全国学調における国語の到達度について、「全国平均とほぼ同じ」という結果が出ている。また、児童質問紙の、「読書は好きですか。」「国語の勉強は好きだ。」の設問に対して、肯定的な回答がそれぞれ全国平均を下回っている。

この結果から、読書活動の活性化と、「学ぶ楽しさ」「わかる喜び」が実感できる授業づくりを進め、言葉による見方・考え方を働かせて主体的に言語活動に取り組み、必要な言葉の力を身に付けた児童を育成していきたいと考えた。

2. 研究の目的

研究初年度にあたる令和元年度は、文学的文章教材の教材解釈と指導方法の工夫を中心に研究を進め、「教材のよさやおもしろさを捉えて指導に生かせた。」等、教員が授業力の向上を自覚することができた。

今年度は、「主体的・対話的で深い学び」における目指す児童の姿を明確化して授業研究を進めることにした。

また、「漢字」「語彙」「文や文章」「音読、朗読」を計画的・系統的に指導し、思考力、判断力、表現力等の土台となる知識及び技能の定着と向上を図ることにした。

Ⅱ 研究方針

1. 研究の力点

(1) 教員の教材研究力・単元構想力の向上

- ①学年別の教材解釈研修会の開催
- ②単元全体の指導計画・評価計画の立案

(2) 主体的・対話的で深い学びのある授業づくり

①主体的な学び

ア 目指す児童の姿

- ・読書や文章の読解への意欲を高め、見通しをもって粘り強く学習に取り組む。
- ・自己の学びを振り返って考えや疑問をもち、次の学習につなげる。

イ 手だて

- ・学びの意欲を高めるめあて・発問の工夫
- ・感想や疑問等子どもの考えを生かす工夫

②対話的な学び

ア 目指す児童の姿

- ・自分と他者の意見や考え方を比較したり、自分だけでは気付くことが難しい気付きを得たりしながら、考えを広げたり深めたりする（児童との対話）。

- ・物語を繰り返し読んだり、同じ作者の他の作品や、同じテーマの作品を読んだりして、物語の世界を豊かに想像する（教材との対話）。

イ 手だて

- ・子ども同士の対話を促す学習活動・学習形態の工夫
- ・教材との対話を促す音読指導・ノート指導・並行読書の工夫

③深い学び

ア 目指す児童の姿

- ・言葉による見方・考え方を働かせて、主体的・対話的に学び、自分の考えを更新する。
- ・語句や文章を相互に関連付けてより深く理解したり、様々な考えを精査して自分の考えを形成したりする。

イ 手だて

- ・論理的思考を促す発問の工夫
- ・自らの考えを形成し、高め合う学習活動（言語活動）の工夫
- ・学びの実感を言語化する振り返り活動の工夫

(3) 言語活動の充実および言語環境の整備

①言語活動及び言語指導の充実

朝学習の時間、国語科モジュールの時間に、朝読書及び漢字、文法、四字熟語や慣用句等の語彙の指導を計画的に進める。

②言語環境の整備

- ・学校図書館の整備
- ・選書指導の推進（並行読書の工夫）



◆並行読書用に準備した図書

Ⅲ 研究の具体的な内容

1. 第1・2学年の指導について

単元名「読んで、かんじたことをつたえ合おう」

教材名「スーホの白い馬」(大塚勇三)

(1) 主として育成をめざす資質・能力

- ・身近なことを表す語句の量を増すことができる。(知識及び技能)
- ・場面の様子に着目して、登場人物の行動を具体的に想像することができる。(思考力、判断力、表現力等)
- ・物語を想像したり、感想を交流したりしながら、物語を読む楽しさを実感しようとするができる。(学びに向かう力、人間性等)

(2) 思考力、判断力、表現力等を伸ばすために日常的に指導している事項

①語彙

- ・新出漢字を使った言葉集めや、難語句の意味や用法を話し合って解決している。
- ・教科書巻末資料「言葉の宝箱」を活用して、語彙を増やしている。

②文や文章

- ・朝学習の時間に、ワークシートで、主語と述語等の指導をしている。

③音読

- ・授業、朝学習の時間、家庭学習等、音読の時間を確保して指導している。

(3) 設定する言語活動

- ・詩や物語などを読み、内容を説明したり、考えたことなどを伝え合ったりする活動(物語の感想の交流)。

(4) 指導について

本教材は、モンゴルの草原に住む羊飼いの

少年スーホと、白い馬との強い結び付きが、馬頭琴の由来として描かれた物語である。スーホと白馬の言動を表す言葉に着目させ、場面の様子や登場人物の気持ちを豊かに想像させることのできる教材である。

(5) 主体的・対話的で深い学びに向けて

①主体的な学び

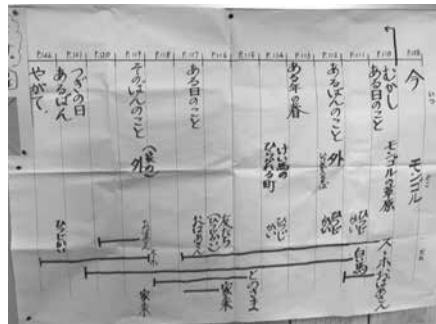
- ・第二次の精査・解釈を中心とした授業では、単元のめあてに沿って、振り返りとして場面ごとの感想をノートに書かせ、第三次の言語活動につなげた。

②対話的な学び

- ・第二次の授業の導入で、前時に児童が「振り返り」として書いた文章を紹介し、自分の感想と比較できるようにした。
- ・並行読書として外国の民話を扱った作品を紹介した。児童は、外国のようすに興味をもって読んでいた。
- ・叙述を根拠にして考えを発表すること、友達のととの共通点や相違点をはっきりさせて発言することを指導した。

③深い学び

- ・第一次の構造と内容の把握の段階で、物語の時・場・人を捉え、一覧表にして教室に掲示した。第二次の精査・解釈、第三次の考えの形成の段階で、出来事の順序を確かめ、児童が考えを整理するためのツールとした。



◆掲示した物語の構造

- ・必死に狼を追い払った白馬に話した、「これから先、どんなときでも、ぼくはおまえといっしょだよ。」というスーホの言葉が、物語の結末への伏線となっていることに気付くように発問を工夫した。
- ・第三次の考えの形成（言語活動）では、いちばん心を動かされたところを、その理由と共に発表するように指導した。

(6) 児童の姿から



◆授業の様子（2年生）

【A児：3の場面の振り返り】

なんで白馬はとのさまをのせなかったかということ、スーホをなぐったり、けとばしたりしていたのもあるし、スーホが心をこめて世話をしてくれたおかげで力もついたり、ひつじたちもまもれるようになったからです。とのさまがのろうとしたとき、おそろしいいきおいではねあがったと思うし、とのさまはスーホがそだてたものをうばっただけなので、のせなかったと思います。

【B児：4の場面の振り返り】

なんでスーホがむちゅうで組み立てたかということ、白い馬と楽しい思い出をまた作りたいし、やくそくを白い馬としたので、ちゃんとやくそくをまもることにしたと思いました。

【C児：心をうごかされたところ】

ぼくは、「よくやってくれたね、白馬。本当にありがとう。」と言ったところに心をゆりうごかされました。なぜかという、「本当にありがとう。」という言い方に、ひつじをおおかみからまもった白馬を思う気持ちがとてもつたわるからです。

【D児：心をうごかされたところ】

ぼくは、スーホが「よくやってくれたね、白馬。本当にありがとう。これから先、どんなときでも、ぼくはおまえといっしょだよ。」と言ったことに、心がうごかされました。なぜかという、これから先、どんなときでもいっしょだよという気持ちがつたわってくるし、それほどスーホは白馬のことがすきなんだなあという気持ちもつたわってきました。それが今でもつながっていて、スーホは、いつでも、どこへ行くときも馬頭琴をもっていくことも、おくぶかく分かりました。だから、この場面が一番「スーホの白い馬」の中で、心がうごかされたとかんじました。

(7) まとめ

- ・場面が進み、スーホと白馬とのつながりが強まるにしたがって、児童も登場人物に寄り添う度合いが高まり、スーホの心情や白馬の行動について考えを出し合う活動に積極的に取り組むようになった。
- ・馬頭琴を弾くスーホの心情について、多くの児童が物語前半の「これから先、どんなときでも、ぼくはおまえといっしょだよ。」という言葉と結び付けて捉えることができた。

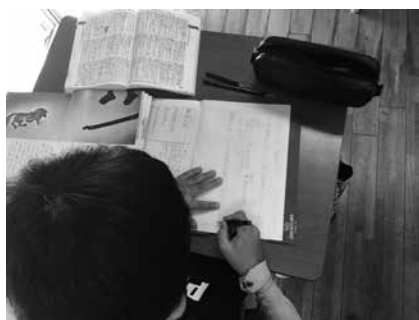
2. 第3・4学年の指導について
単元名「気持ちの変化を読み、考えたことを話し合おう」
教材名「ごんぎつね」（新美南吉）

- (1) 主として育成をめざす資質・能力
- ・様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増し、語彙を豊かにすることができる。(知識及び技能)
 - ・登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わり結び付けて具体的に想像することができる。(思考力、判断力、表現力等)
 - ・読んで考えたことを進んで話し合い、他者との考え方の違いに気付きながら、自分の考えをさらに深めようとすることができる。(学びに向かう力、人間性等)

(2) 思考力、判断力、表現力等を伸ばすために日常的に指導している事項

①語彙

- ・授業中に必要に応じて国語辞典を引いて言葉の意味を調べる習慣を身に付けさせている。
- ・教科書「言葉の宝箱」を活用し、気持ちを表す言葉などの語彙を増やしている。



◆机上に国語辞典を置く児童

②文や文章

- ・国語モジュールの時間に、ワークシートで、文法の指導をしている。

③音読

- ・授業の始め、国語モジュールの時間、家庭学習で、音読するように指導している。

(3) 設定する言語活動

- ・詩や物語などを読み、内容を説明したり、考えたことなどを伝え合ったりする活動(感想文の交流会)。

(4) 指導について

ちょっとしたいたずらが思わぬ影響を及ぼしてしまうこと、せめてもの償いをという切ない思い、一方的な共感、誰かに認められたいという願い…。「ごんぎつね」は、児童が自分の経験と重ね、「ごん」のひたむきな思いや行動に寄り添いながら読むことができる教材である。自我の芽生えるこの時期に、自分の心を見つめ、想像力を高めながら読み進めさせた。

(5) 主体的・対話的で深い学びに向けて

①主体的な学び

- ・単元のめあてを「ごん気持ちの変化を読み、考えたことを話し合おう」と設定し、読書感想文を書いて交流する学習計画を立て、児童が見通しをもって学習できるようにした。児童は、授業の振り返りとして場面ごとの感想を書きためていき、テーマを決めて感想文を書いた。

②対話的な学び



◆ペア対話をする児童

- ・意見の交流にはペア対話を取り入れた。全員が発問に向かい自分なりの考えをもてるように、ペア対話から全体交流の流れで授業を進めた。ペア対話は、児童一人一人が自分の考えを発表する機会、友達の考えを聞く機会を増やすことにつながった。
- ・読書感想文を書く前にテーマを決め、それに沿って感想文を書かせ、テーマごとに交流させた。読書感想文と交流した内容は、国語モジュールの時間に読み合えるコーナーに展示し、すべての作品や意見を読めるようにした。

③深い学び

- ・情景を表す語句に着目させ、叙述を根拠にして中心人物「ごん」の心情の変化を想像しながら物語を読み味わわせた。
- ・「ごん」の人物像を丁寧に読み取り、独立した小狐で、村の人々や生活に興味をもっているが、姿を隠す、周囲の様子を見る、いたずらをしたくなるなどの行動の特徴があることを押さえて読み進めた。
- ・単元のめあてと、ごんの特徴を短冊黒板に書き、単元の学習中はいつでも児童の目に触れるようにしておいた。



◆短冊黒板の活用

(6) 児童の姿から

- ・授業では、課題について話し合いを進めながら、児童はノートに自分の考えや、板

書に書かれた友達の考えを書いていた。

- ・授業の終末には、単元のめあてに対する振り返りとして、場面ごとのごんの気持ちの変化を捉えて、自分の考えをノートにまとめ、第三次の言語活動に向けての準備を進めていった。



◆児童のノート「授業の振り返り」

【A児：3の場面の振り返り】

ぼくは、3の場面で、ごんの特ちょうはあんまり出なかったと思います。理由は、いたずらをあんなにしていたのに、いきなりしなくなったからです。ごんの気持ちは、どんどん相手（兵十）のことを考えるようになったと思いました。理由は、最初は投げこんでいたけど、どんどんそっと置くようになったり、いわしをやったら失ばいしたのを見て、同じことをしなかったからです。

(7) まとめ

- ・思い込みによってごんの気持ちに変化が生じ、それまでとは行動が変わったことを、児童は具体的に捉えることができていた。
- ・ごんの特徴に加えて、場面ごとのごん的位置を確認していくことが、6の場面でごんが兵十に撃たれるという結末にも関連し、重要であることを検証できた。

3. 第5・6学年の指導について
単元名「表現の工夫をとらえて読み、
それをいかして書こう」
教材名「『鳥獣戯画』を読む」(高畑勲)
「日本文化を発信しよう」

(1) 主として育成をめざす資質・能力

- ・語感や言葉の使い方に対する感覚を意識して、語や語句を使うことができる。(知識及び技能)
- ・目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするとともに、事実と感想、意見とを区別して書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができる。(思考力、判断力、表現力等)
- ・必要な情報を読み取って伝え合うことに見通しをもって粘り強く取り組むとともに、進んで読書をし、得た知識が効果的に伝わる文章を書こうとすることができる。(学びに向かう力、人間性等)

(2) 思考力、判断力、表現力等を伸ばすために日常的に指導している事項

①語彙

- ・必要に応じて国語辞典で言葉の意味と用法を調べる習慣を身に付けさせている。
- ・教科書「言葉の宝箱」を活用して、気持ちを表す言葉等の語彙を増やしている。

②文や文章

- ・国語モジュールの時間に、ワークシートで文法の指導をしている。

③音読

- ・授業、国語モジュールの時間、家庭学習等で、繰り返し音読するようにしている。

(3) 設定する言語活動

- ・学校図書館などを利用し、複数の本や新聞などを活用して、調べたり考えたりし

たことを報告する活動(日本文化を発信するパンフレットの作成)。

(4) 指導について

本教材は、国宝の絵巻物「鳥獣戯画」の一場面を解説したものである。アニメーション監督として有名な筆者は、「言葉だけでなく絵の力を使って物語を語る」表現方法が、後世の作品に受け継がれ、現在の漫画やアニメーションにもつながる日本文化の大きな特徴であると称賛している。

本教材は、読者を引きつける書き出し、読み手に語りかけるような表現や体言止め、「実にすばらしい。」のように端的に評価を表す言葉など、表現の工夫が多彩である。また、絵や写真の配置を工夫して、「鳥獣戯画」の絵と照らし合わせて話を展開することで、内容を読み手に効果的に伝えるための構成の工夫が的確である。

単元の前半では、「『鳥獣戯画』を読む」の読解を中心に指導し、「鳥獣戯画」を鑑賞しながら筆者の表現の工夫とその効果を探り、後半では「日本文化を発信しよう」を参考にして、図書等の資料から調べた日本文化についてのパンフレットを作成した。



◆授業の様子(6年生)

(5) 主体的・対話的で深い学びに向けて

①主体的な学び

- ・単元の扉ページを参考にして単元のめあ

てを設定し、学習した絵や写真の使い方、効果的に伝えるための表現の工夫を活用して、日本文化についてのパンフレットを作成する学習計画を立て、単元全体の見直しをもたせた。

- ・単元の導入として、社会科で学習した日本文化について振り返る時間を設けたり、「鳥獣戯画」に関する写真や絵巻物等を教室に展示したりして、日本文化や「鳥獣戯画」への関心を高めた。
- ・筆者である高畑勲氏の文章の読み取りを通して、自分が書くための表現の工夫を見つけながら読むというめあてをもたせ、主体的に教材に関わることができるようにした。

②対話的な学び

- ・一人一人が見付けた表現の工夫を付箋に書かせて集約し、グループで、表現の効果について話し合う活動を取り入れた。
- ・並行読書として、日本文化について書かれた本、新聞、インターネット等の資料を集めさせ、資料との対話を通して児童自身が興味・関心を高め、伝えたいという気持ちをもてるようにした。
- ・パンフレットの下書き段階で、絵や写真の使い方、小見出し、文章表現の工夫などについてグループで意見を出し合い、よりよい発信ができるように意見交流する活動を位置付けた。
- ・単元の終末に、パンフレットを読み合い、感想を交流する活動を位置付けた。

③深い学び

- ・筆者が自分の見方を読み手に伝えるための「論の展開」「表現の工夫」「絵の示し方の工夫」等を整理して理解できるように、付箋、色分けアンダーライン、文字囲み等で区別するよう支援した。
- ・自分の表現に活かすことができそうな工夫を見付けることができたのかを振り返

らせた。

- ・パンフレット作成にあたって、誰に何を伝えるかを明確にして内容を整理し、いちばん伝えたいことが相手に伝わるように構成を決めて書かせた。

(6) 児童の姿から

【児童が作成したパンフレット】



【パンフレットを相互評価した内容】

- ・写真が文章に合わせて使われている。
- ・体言止めで読者に印象付けている。
- ・語りかける表現を使っている。
- ・効果を知って温泉に入りたくなった。
- ・小見出しの付け方に引き込まれた。
- ・説得力のある言い方が使われている。

(7) まとめ

- ・言語活動として作成したパンフレットには、本単元で学習した構成や表現の工夫が活用されていた。
- ・作品を読み合い、相互評価する活動では、パンフレットの内容のおもしろさだけでなく、構成や表現の工夫とその効果が評価の視点となっていた。
- ・本単元の学習で身に付けた力が、今後の学習や生活の場面で活用されるとよいと感じた。書く活動に取り組むときに、本単元の学習を想起させることにした。

Ⅳ 研究の成果と課題

1. 力点1「教員の教材研究力・単元構想力の向上」について

①学年別の教材解釈研修会の開催

・教育研究会いちいの会の木村祐子先生を講師に招き、重点教材についての教材研究を行い、教員の教材理解を深めた。

②単元全体の指導計画・評価計画の立案

・言語活動につながる単元のめあてを設定し、めあてに向かって振り返りを積み重ねていく単元計画を教師が構想できるようになってきた。
・学習内容に関連する図書を紹介し、並行読書を促す指導の流れが定着した。

2. 力点2「主体的・対話的で深い学びのある授業づくり」について

(1)「主体的な学び」について

①学びの意欲を高めるめあて・発問の工夫

・「単元のめあて」は、読解から言語活動につながる学習の見通しをもてるように、「本時のめあて」は、学習課題の解決に向かう意欲を高めるように意識して設定した。

・高学年では、前時の学習を踏まえて見通しをもち、児童が自分でめあてを設定するように指導した。

②感想や疑問等子どもの考えを生かす工夫

・低学年では、児童の振り返りを学級で紹介して共有する取組が、学級全体の意欲を高めることにつながった。

・子どもたちが書いた感想を班で交流したり、教師がみんなに紹介したりすることで、感想の中に出てきた疑問に共感したり、自分の意見をもったりする姿が見られた。

＊「主体的な学び」を「主体的に学習に取り組む態度」として評価するにあたって、改めて単元評価計画を見直したい。

(2)「対話的な学び」について

①子ども同士の対話を促す学習活動・学習形態の工夫

・ペアやグループで考えを交流する学習活動を単元計画に位置付けたが、友達の意見や考えを聞いて気付きを得たり、考えを深めたりする児童が多かった。

・子どもの感想や考えを基にして意見をつなげることで、関連した内容の考えを広げたり、比較して考えたりすることのよさを味わったりすることができた。

・タブレットのアプリ「ロイロノート」を活用した学習では、どの児童も自分の意見を提出し、互いの意見の共通点や相違点を見付け、集中して取り組むことができた。

②教材との対話を促す音読指導・ノート指導・並行読書の工夫

・朝学習の時間や国語モジュールの時間に、教科書教材の音読に取り組んだことで、内容理解が進み、意欲的に授業に取り組む児童が増えた。

・何度も読んで教材との対話を繰り返すことが、内容理解や、作品の世界を豊かに想像することにつながり、子ども同士の対話を活発にした。読んだ回数を教科書にメモさせたり、時間を測ったりして音読への意欲を高めた。

＊相手の意見を聞いて、質問を通じて理解を深めたり、考えを整理したりすることができるように、質問する力を高めたい。

(3)「深い学び」について

①論理的思考を促す発問の工夫

・文学的文章教材の学習で、中心人物の変化を追っていくという流れが定着し、児童は既習の人柄を表す言葉を使ったり、情景から心情を読み取ろうとしたりして、読みの技能の高まりが見られた。

・主語・述語の関係を捉えて考えさせるよ

うにした。文学的文章教材では、登場人物の行動から気持ちを想像したり、理由を考えたりすることができた。説明的文章教材では、筆者の考えを読み解く手掛かりにした。

②自らの考えを形成し、高め合う学習活動 (言語活動)の工夫

・言語活動を通して、児童が授業の振り返りを生かして自分の考えを再構成し、考えを形成する中で、新たな気付きや考えの深まりを得られるようにした。

③学びの実感を言語化する振り返りの工夫

・単元のねらいに沿って、学習課題についてのまとめとなる「思考の振り返り」と、学び方についての自己評価となる「学びの振り返り」を区別して単元計画に位置付けた。
・高学年では、自分が設定しためあてについて振り返り、評価することで学びの自己調整力を高めることにつながった。

*「言葉による見方・考え方」について、改めて共通理解を図り、具体的な実践につなげたい。

3. 力点3「言語活動の充実および言語環境の整備」について

①言語活動及び言語指導の充実

・教科書巻末資料「言葉の宝箱」を活用し、心情を表す言葉や考えを表す言葉を自分の文章や発言に取り入れられるようにした。少しずつではあるが、語彙が増え、考えを表す言葉を取り入れることができるようになってきた。
・教科書に出てくる言葉のフラッシュカードを作成して意味・文作りなどの活動を行い、言葉を定着させた。
・各教室に「言葉の広場」を設置し、年間通して計画的に言語指導を行い、言葉に関する知識及び技能を高めた。



◆各教室に設置した「言葉の広場」

②言語環境の整備

・学校図書館に、各学年の並行読書用の図書、授業で活用できる図書を入れる棚を設置し、図書担当教員と図書ボランティアで整備した。並行読書の準備が短時間でできるようになった。
・低学年では、「ことわざかるた」「カタカナかるた」を活用し、楽しく遊びながら言葉の定着を図ることができた。そのため、意欲的に本を読む児童が増え、語彙力や文章を書く力が高まってきた。

[おわりに]

今年度は、コロナ禍の影響で、先進校視察を中止し、校内での授業研究においても参観人数を制限するなどの対応を迫られた。そのため、計画を変更して、研究推進に必要な研修図書、児童の学習を広げる図書を充実させることにした。

その中で、児童の読書時間が前年よりも延びたことが学校アンケートで確認できた。新しい生活様式の中で、読書が見直されたのではないだろうか。

本校では、来年度も国語科の研究を続けていくことにした。それぞれの学年に応じた目指す子どもの姿をもう一度具体化し直し、その姿の実現を目指して教材研究、授業研究を進めていきたいと考えている。

(前校長：武藤耕嗣)